



ナンバンギセル
(南蛮煙管・思ひ草)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

双子葉植物ハマウツボ科ナンバンギセル属の一年草の寄生植物。草丈10cmから20cm、小さな葉の脇から花柄を立て、先に3cmほどのパイプに似た薄紫色の花を横向きにつける。ススキやサトウキビ、イネなどのイネ科草本の根に寄生する。寄主の根から養分を吸い取ることから、サトウキビや陸稲に寄生すると寄主を枯死させることもあるという。

古来、日本に自生する。ススキやカヤの根元に頭を垂れるようにひっそりと咲いているのは可憐でさえあり、その姿をして万葉人は「思ひ草」と呼んだ。万葉集に1首。巻の10、読み人知らず。

道の辺(へ)の尾花が下(もと)の思ひ草 今さらさらに何をか思はむ

下の句で、「(恋の思いを抱いて悩んでいたのだけれど、)今更もう何を悩んだりしようか、何も悩んだりはしません、貴方のことを想いつづけるのですよ」と詠う。悩みを吹っ切り貴方を想いつづけることにしたのは、恋

が成就したからなのか、悲恋に終わったからなのか。爾来、この歌を本歌として多くの歌人が「尾花がもとの思ひ草」を詠った。

くれはつる尾花がもとの思ひ草 はかなの野辺の露のよすがや (藤原俊成女)

野辺見れば尾花がもとの思ひ草 かれゆく冬になりぞしにける (和泉式部)

人知れぬ憂き身にしげき思ひ草 おもへば君ぞ種はまきける (藤原隆房)

思ひ草は一年生草本であるから、尾花の元とはいえ、藤原隆房の歌にあるように誰かが種を播かなければ花は咲かない。播いて、播かれた思ひ草の種。咲いた花に、夕暮れ時、恋人を待ちわびて物思いに耽るわが身を重ねる。

恋の成就にせよ悲恋にせよ、物思いに耽る思ひ草の頬はピンク色に染まっている。ナンバンギセルの花色のように。



ミツバアケビ
(露崎浩原図)